

佳作

試練と闘う事は本気で生きていく証

長崎県 向陽高等学校三年 井手端 真由

私達は、どんな辛い事、高い壁だって乗り越えようと必死になります。途中くじけそうになったり、諦めそうにもなるだろう。だけど壁を乗り越えた先には未知の成長した自分に出会い、また次の目標に向かって歩み出す力が人にはあります。

だからこそ私は伝えたい。人生は幸せな事より苦しむ事が多いかもしれない。けど、その一握りの幸せをつかむために我武者羅に努力する事が大切だということ。

中学時代、私はいじめを受けていた。私は秀でたものは特に無く、人と関わるのが下手なため、皆から非難されいじめの標的となった。独りになった私に味方なんていない。誰の助けも来る訳がない。両親に迷惑をかけたくなかった私はただひたすら耐えていた。日に日にボロボロになっていく心、毎日布団の枕は涙でぬれていました。朝、両親から

「顔色悪いけど大丈夫か。」

「風邪？それとも悩みでもあるの。」

そう聞かれた時は決まって

「全然！何もないよ。」

と言って、作り笑いで誤魔化していました。毎朝、一家から踏み出すと頭の中は幻覚に襲われ、吐き気もする程でした。

とうとう我慢の限界が来たのです。それも突然に。いじめに我慢しきれなくなった私は、逃げるように教室を飛び出した。悲しさや何もできない己の無力さが涙となって込み上げてきた。悔しくて悔しくて、もう誰も知らない所で死のう。私は学校を抜け出そうとした。だが突如先生が現われ、逃げ場を無くした私はそばにあったトイレに籠城した。外へ出そうと説得する先生に、

「もうほっといて！私には耐えられない。だから一人で逝かせてよ。」

と大声で叫んだのを今でも覚えています。そんな私に先生は、

「何馬鹿な事言ってるの！あなたが死んだら残された人はどんな想いで生きていくと思ってるの。あなただっ

てやりたい事、夢だっ

てあるんですよ。」
言われた瞬間家族との思い出や日常が頭をよぎりました。家族と一緒にいられなくなる。それでもいいの？自分に問い続けた。気づけば、私は生きたいと願っていた。その日の夜、母あてに先生から電話があった。母の顔から笑顔が消えた。私は泣きながらひたすら謝っていた。

そんな私を見た母は、

「今は何も言わなくていい。今日はもう休みなさい。」
と言った。父は笑顔で接してくれた。両親を悲しませてしまった。私が受けたいじめよりも、両親が悲しむ姿を見るのが辛かったし苦しかった。これ以上悲しませてはいけなと心に誓った。強くなるんだと。

その後、私は少しずつだった、はつきり物を言ったり、堂々と行動できるようになった。強がっている事が多く、苦しい事もあったが、そんな時は母が相談に乗ってくれた。父は人との関わり方を教えてくれた。私は両親の支えがあったから今こうして生きています。

十五歳の春。私は親元を離れ、県外にある製菓学科のある高校へ入学した。両親は、

「夢叶えたいんでしょ。母さん達は止めないから好きな所へ行きなさい。」

「真由は本当に行きたいんじゃない。夢追いかけんさい。母さんと康平は俺が支えるけん。」

そう言って十五歳の私を送り出してくれました。別れた後、不安や寂しさから泣き出してしまいました。これからどう生活したらいいの。私に友達なんてできるの、そんな不安を持ちつつ高校生活を迎えました。最初の頃は、話かけづらく物怖じしていた私ですが、気づけばたくさんの友達ができ、夢に向かって一緒に頑張っていました。また私はクラブ活動もさせてもらえ、三年間テニス部と

して、毎日朝早くから夜遅くまで一生懸命にやり抜きました。高校生活でも「なんで私だけ」という劣等感や人間関係などで悩む事はありましたが、私には夢や目標があったため、毎日がとても充実していました。気づけば私はすでに高校三年。今は夢の実現のため、就職活動に勤しんでいます。こうした三年間が送れたのは、両親や私に関わってくださった方々のお陰だと思っています。

最後、この作文を読んでいる方に本当に伝えたい事があります。どんなに苦しく大変な時、自分に負けそうな時、自ら立ち向かっていくこと、立ち向かい最後まで諦めずやり通す事が大切だと思います。そうする事で過去に振り返った時、こんな自分でもやりきれたんだ、乗り越えられたんだという自信になります。私もその一人でした。頑張り続け、誰にも認められなかったとしても、自分だけは頑張った自分を認めてあげてください。苦しんでいるという事は、あなたが本気で生きている証拠です。一生懸命人生と闘っているからです。自分を信じて、前へ進んでください。私は応援しています。